

JICA日本語教育ボランティアガイド



日本を学んだあなたを。
日本を学びたあなたを。
日本を育むあなたを。

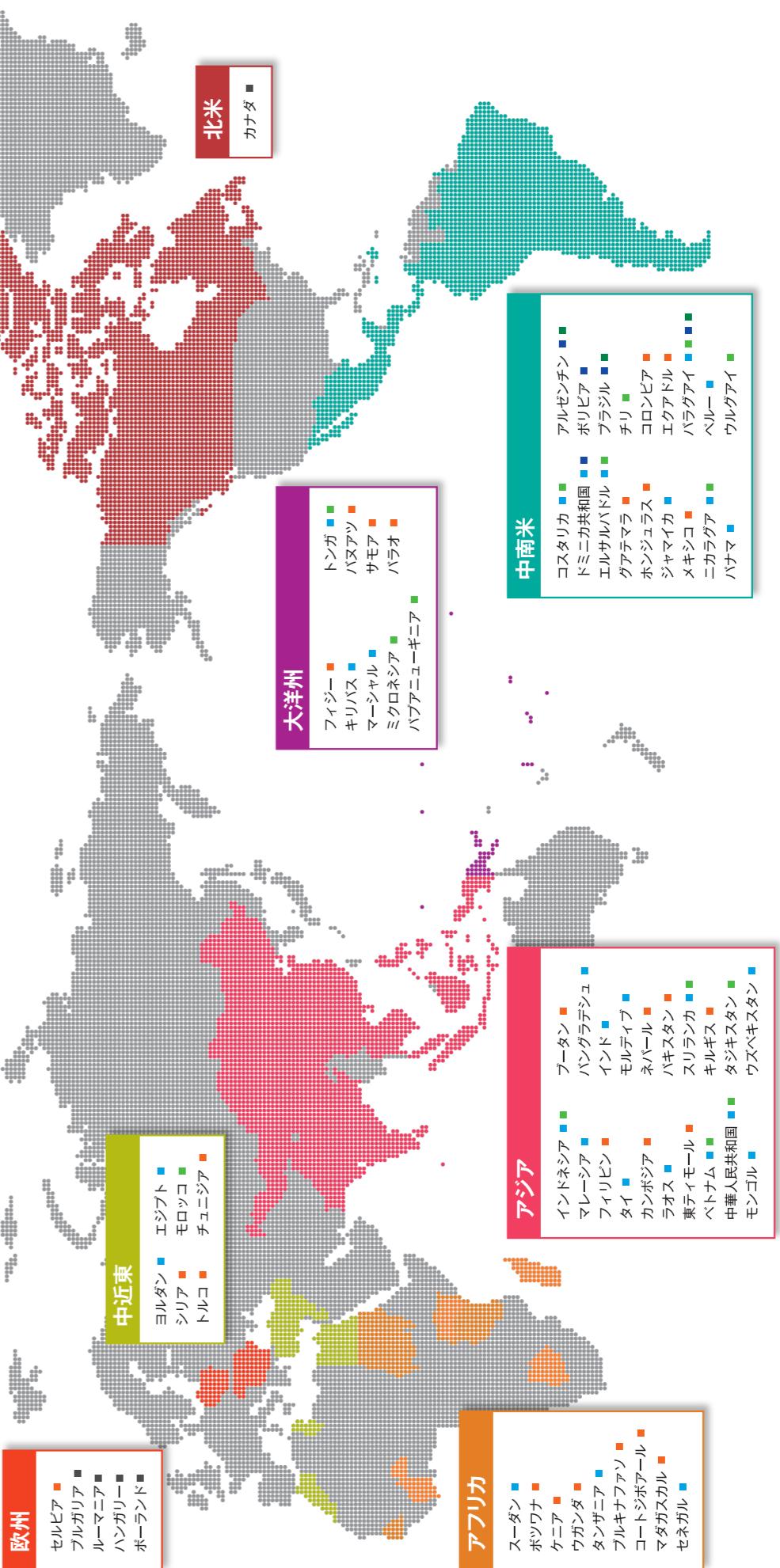


JICA日本語教育分野ボランティア活動国

(2015年10月現在)

■派遣実績あり
■日系社会青年ボランティア
■日系社会シニアボランティア

■青年海外協力隊
■シニア海外ボランティア



JICAボランティアウェブサイト
<http://www.jica.go.jp/volunteer/>

独立行政法人国際協力機構 (JICA)
青年海外協力隊事務局 講師募集課 (JICAボランティアへの応募に関するお問い合わせ)
青年海外協力隊事務局 日本語教育担当 (JICA日本語教育ボランティアに関するお問い合わせ)

TEL:03-5226-9813
TEL:03-5226-9848

2015年11月

日本語教育ボランティア

JICA日本語教育ボランティアの対象年齢や活動内容は次の4種類に分かれます。具体的な活動は、募集説明会で配布される「要請一覧」やJICAボランティアウェブサイト「要請情報検索」をご覧ください。



青年海外協力隊

応募年齢
20歳
~
39歳

職種名	派遣地域	配属先	対象者	主な活動内容
日本語教育	アジア・中近東・アフリカ・中南米・大洋州	教育機関（小・中・高・大学等） その他の機関（職業訓練校・公開講座）	小学生・社会人	・学校教育における日本語の授業の実施 ・趣味、教養としての日本語の授業の実施 ・仕事で使うための日本語の授業の実施 ・現地の日本語教師への指導、アドバイス ・日本文化紹介イベント等の企画、運営協力
日本語教育	アジア・中近東・アフリカ・中南米・大洋州	教育機関（小・中・高・大学等） その他の機関（職業訓練校・公開講座）	小学生・社会人	・学校教育における日本語の授業の実施 ・趣味、教養としての日本語の授業の実施 ・仕事で使うための日本語の授業の実施 ・現地の日本語教師への指導、アドバイス ・日本文化紹介イベント等の企画、運営協力
日本語教育	中南米（日系社会）	日系団体運営の日本語教育機関	主に日系人（年少者中心）	・配属先での日本語の授業の実施 ・音楽、書道、体育などの指導 ・日本文化関連イベントや学校行事の企画、運営 ・日系団体主催行事等への協力

職種名	派遣地域	配属先	対象者	主な活動内容
日系日本語学校教師	中南米（日系社会）	主に日系人（年少者中心）		

日系社会青年ボランティア

応募年齢
20歳
~
39歳

職種名	派遣地域	配属先	対象者	主な活動内容
日系日本語学校教師	中南米（日系社会）	主に日系人（年少者中心）		

シニア海外ボランティア

応募年齢
40歳
~
69歳

職種名	派遣地域	配属先	対象者	主な活動内容
日本語教育	アジア・中近東・アフリカ・中南米・大洋州・歐州	学校教育機関（高校・大学等） その他の機関（政府関連機関・公開講座等）	学生・社会人	・学校教育における日本語の授業の実施 ・趣味、教養としての日本語の授業の実施 ・シラバスや教科書の改訂 ・現地の日本語教師への指導、アドバイス ・現地の日本語教師の養成支援 ・日本文化紹介イベント等の企画、運営協力
日本語教育	アジア・中近東・アフリカ・中南米・大洋州	学校教育機関（高校・大学等） その他の機関（政府関連機関・公開講座等）	学生・社会人	・学校教育における日本語の授業の実施 ・趣味、教養としての日本語の授業の実施 ・シラバスや教科書の改訂 ・現地の日本語教師への指導、アドバイス ・現地の日本語教師の養成支援 ・日本文化紹介イベント等の企画、運営協力
日本語教育	中南米（日系社会）	日系団体運営の日本語教育機関	主に日系人（年少者中心）	・配属先での日本語の授業の実施 ・配属先の周辺校を巡回し、現地の日本語教師に対する日本語教授法のアドバイスや勉強会の実施 ・現地での教師養成講座や教師研修実施 ・日本文化関連イベントや学校行事の企画、運営 ・日系団体主催行事等への協力

日系社会シニア・ボランティア

応募年齢
40歳
~
69歳



CONTENTS

03 ボランティアの活動紹介

- 03 インド
青年海外協力隊 川乱 麻里さん
- 05 ウズベキスタン共和国
青年海外協力隊 瀬戸口 達也さん
- 07 モンゴル国
シニア海外ボランティア 浮田 久美子さん
- 09 ヨルダン・ハシェミット王国
青年海外協力隊 中山 裕子さん
- 11 セネガル共和国
青年海外協力隊 前田 智子さん
- 13 パラグアイ共和国
青年海外協力隊 石川 苑子さん
- 15 アルゼンチン共和国
日系社会青年ボランティア 正田 晓子さん
- 17 ブラジル連邦共和国
日系社会シニア・ボランティア 櫻井 美香さん
- 19 トンガ王国
青年海外協力隊 鈴木 千咲さん
- 21 バブアニューギニア独立国
シニア海外ボランティア 鈴木 馨さん

23 JICAボランティアに対する JICAの支援制度のご紹介

24 JICAナレッジサイト（日本語教育分野） 派遣実績と帰国後の進路のご紹介

帰国ボランティア座談会

- 青年海外協力隊 宮越 正史さん
- 青年海外協力隊 太原 徹雄さん
- 青年海外協力隊 木村 佳代子さん
- 日系社会青年ボランティア 鈴木 宏子さん

29 応募を考えている人へ JICA日本語教育ボランティア Q&A

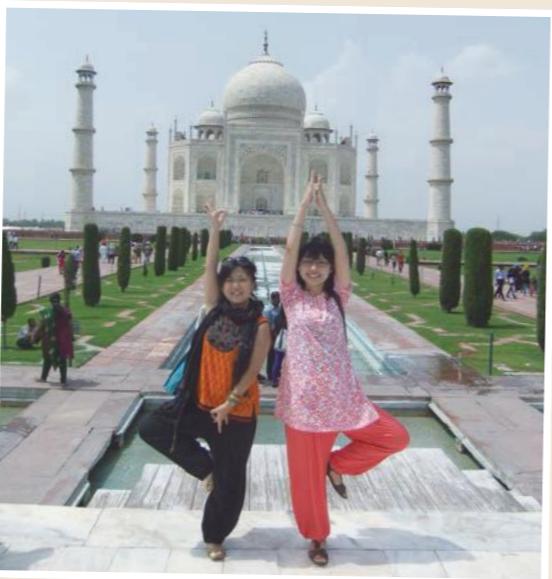


のぞいてみよう! JICAボランティア

今では楽しい思い出、初めての赴任国で！

びっくりインド生活！

赴任国のインド、特にデリーは気候も人も慣れるまで大変でした。毎日のように何かしら問題が起きるので、飽きるということがありません。夏は暑さで鼻血を出し、雨期は毎日浸水して、冬は寒くて眠れず、毎日が修行のようでした。日本に帰りたくなるくらい辛いこともありましたが、すべて自分が成長できるいい経験。インド人の考え方には本当にびっくりさせられますが、赴任から1年以上たった今では、それも生活の一部だと楽しんでいます。



A close-up photograph of a young girl with dark hair, wearing a bright red zip-up hoodie over a light blue collared shirt. She is smiling warmly at the camera. Overlaid on the right side of the image is vertical Japanese text in a large, bold, black font. The text reads: "こちらから教えるだけでなく、共に学び合いながらお互いにお互いに大きな成長を。". The background is slightly blurred, showing what appears to be an outdoor setting with other people.



海外で日本語を教える夢を
JICAボランティアで現実に。

デリーで開かれる日本関連イベントにも連れて行くようにしています。さらに夏休みには、私的休暇を利用して兵庫県の学校へ10日間のスタディーツアーを引率しました。」
また、この学校



「今まで青年海外協力隊」というと、アーリカで井戸を掘つたり砂漠を緑化したりというイメージしかなく、自分とは遠い世界だと思っていました。でも、日本語教師や日系日本語学校教師もあることを知つて、初めて身近に感じました。自分も日本語教育ボランティアに参加することで国際協力に貢献し、自分を成長させることができるのではないかと思ったんです。」

途上国での生活は不安もあつたが、OBと直接話をし、任地での経験を楽し
体的に参加を考えるようになったという。

もっと日本のことを探りたい、
そんな生徒の気持ちに応えたい。

実際の日本文化に触れてほしい。

れる子も。他のアジアの国に比べると、インドにはまだまだ日本食も日本のサブカルチャーも普及していないが、日本のことを行ってみたいたいという生徒が多い。それは川乱さんにとって大きな喜びであり、責任の重さでもある。



一方的に教えるのではなく、

配属先は川乱さんが初代隊員、すべてが手探りだった。常に意識したのは、技術補完研修で学んだ「目の前の学習者一人一人を大切にする」ということ。文化や人間関係のスタイルが違つても、相手を尊重してコミュニケーションを密にすることを大切にしている。また、研修で出会った仲間とは、派遣後もSNSなどでの交流があり、活動のことや将来について情報交換し合っているという。

「1年目は苦労の連続でした。でも今は、日々生徒の笑顔を見られることがとても幸せです。生徒と接している時が一番楽し



日本の大学で勉強するのが夢だった生徒が東京大学に合格したときは「自分のことのようにうれしかった」



青年海外協力隊
平成24年度2次隊
川乱 麻里

Mari Kawamidare
大学で日本語教育を専攻し、卒業後
オーストラリアで日本語のティーチン
グ・アシスタントを経験。帰国後、中学時
代から希望していた海外での日本語教
師になるため青年海外協力隊に参加。



ひとくちメモ：忘れられない日本語編

04

●「日本語で話していると、優しくなる。」使う言語によって、口調だけでなく思考も性格も変わるそうです。本当? (ヨルダン) ●「三つ子の魂百まで」忘

物がひどい私に向かって学生が一言。覚えた諺を使いたかったんだろうけど…。(ウズベキスタン)



海外で改めて感じた、人との繋がりの大切さ。

日本語教育で新たな絆を創りたい。

どんな経験も人生の糧になる。
そんな思いでJICAボランティアに。

「海外で日本語を学んでいる人たちに、現地へ赴いて直接教えてみたい。」
日本で約2年間、日本語教師として働いているうちにそう考えるようになった、という瀬戸口さん。そのときにちょうど見つけたのが、JICAボランティアの募集広告だった。

「海外での生活経験はありましたが、途上国では行ったことがなかったので不安はありませんでした。どんな生活が待っているのか、想像もつかなかつたです。しかしそういった経験も今後自分の人生の糧になるかもしれません」と思い、応募に踏み切りました。

とはいってもまだ日本語教師としての経験が浅かつたので、面接時には、留学や転職経験で培った環境対応力や生活適応力をアピールした。それが功を奏し、見事JICAボランティアへの道が開けたのです。

どうせなら全く知らない国へ。
期待に胸を膨らませた海外派遣。
瀬戸口さんにとってウズベキスタンは第3希望の国だった。

「国を選ぶにあたり、どうせなら今まで全く知らなかつた国へ行ってみたいという気持ちがあつたんです。中央アジアは、自分にとっては未知の国。でも、不安よりも期待のほうが大きかったですね。」

任地のタシケントはウズベキスタンの首都であり、地下鉄やバスなどの公共機関

一員だ。

「先輩隊員が6代にわたって築いてくれたものも多いので、その財産をなるべく崩さないよう努めています。それに加えて、授業開始の号令や試験時のルールなど、なるべく日本の授業スタイルを取り入れるよう、私なりに工夫もしています。」



こうした代々の協力隊員のアイデアの積み重ねが、この配属先での日本語教育をさらに内容の濃いものに進化させている。

海外に出て改めて感じた、人と人との繋がりの大切さ。

ある朝、大学に行つたときのこと。教室に入つた途端に学生たちが日本語で「ハッピー・バースデー」を歌つてくれた。瀬戸口さんの誕生日、学生たちからののプレゼント・プレゼントだった。

「赴任して一番うれしかつた出来事でも、こんなにたくさんの人たちが日本で興味を持ってくれていて、日本語を勉強してくれていることに感動しましたね。ここに来るまでは、想像もしていませんでした。そして、今の日本に減りつづ



青年海外協力隊
平成24年度3次隊
瀬戸口 達也
Tatsuya Setoguchi

大学を卒業後、日本語教師として国内の日本語学校に2年間勤務。海外で日本語を教えたいたいという思いから青年海外協力隊に応募し、ウズベキスタン国立世界言語大学で活動。



のぞいてみよう! JICAボランティア

同僚に聞きました!

瀬戸口先生ってどんな人?

瀬戸口先生の印象は?

優しくて、楽しい先生です。毎日、大学のために一生懸命活動してくれています。

どんな活躍をされていますか?

少しでも日本語が上手になるよう、日々興味深い授業や文化イベントを行っています。いつも楽しくて面白い授業は、学生たちからも好評ですね。

学校や授業はどう変わりましたか?

学生たちの日本や日本語についての興味がとても強くなりました。日本語を勉強したいという学生がとても増えています。



印象に残っている授業やイベントは?

ステージで学生と一緒に、日本語とウズベク語で日本の歌を歌いました。日本の料理も一緒に作りました。寿司は知っていましたが、この時はたこ焼きも作りとてもおいしかったです。



協力隊員のアイデアの
積み重ねが、大きな財産に。

この大学へは、瀬戸口さんで既に7代目のJICAボランティア。学生たちも日本人の受け入れに慣れているので、最初から歓迎ムードだった。

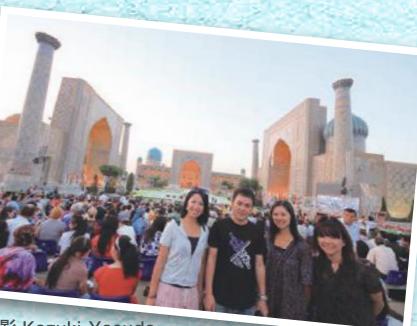
「日本に興味のある学生が思つた以上に多く、配属当初から日本や日本文化についての質問が絶えませんでしたね。日本に対しても、とても良いイメージを持つてくれているなど感じました。」

赴任当初はやはり日本の大学と違うところが多くあり、慣れるのに少し時間がかかつたが、今ではすっかりこの大学の忙な日々だ。

人と人との繋がりの重要性を改めて感じさせられました。」

ウズベキスタンでの体験が、瀬戸口さんのこれから的人生に重要な役割をもたらすことは間違いない。

る人との繋がりの重要性を改めて感じさせられました。



撮影 Kazuki Yasuda

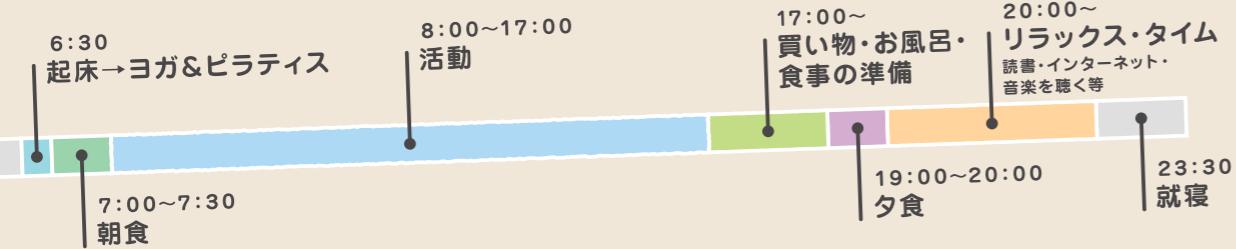


行政機関の内側から改革を。ボランティアの力が、国の教育を変えるかもしれない。



のぞいてみよう! JICAボランティア

浮田さんの、いきいきモンゴル生活!



毎日、体を動かすようにしています。毎朝のヨガとピラティスの習慣で、この極寒の地でも風邪知らず。12時前には寝て、質のいい睡眠をとるようにしています。仕事は遅くなってしまっても職場で終わらせ、家や休みの日に持ち込まないように、オンとオフのメリハリをつけています。休日やプライベートの時間は、友達と食事をしてお酒を飲んだり、体をよく動かしたり、部屋の掃除をしたり。頑張った自分には、まめにご褒美をあげています。



海外で日本語を教える魅力に取りつかれ、3度目の海外派遣へ。

浮田さんはすでに、3度目のJICAボランティアだ。最初に応募を考えたのは、サモアへ旅行したときのこと。ここで現地の協力隊員に出会ったのがきっかけだった。

「そのとき、たまたま日本で個人的に友人に日本語を教えていて、とても面白かったんです。日本語教師になつてすぐにも海外で働きたいと思いましたね。」

帰国後、浮田さんは早速、日本語教師養成講座に通い始めた。養成講座修了後、青年海外協力隊に応募し、そして合格。

「まず1度目のベトナムで、海外で日本語を教える楽しさにすっかり取りつかれてしまつたんです。」という浮田さん。2度目は、短期ボランティアとしてミクロネシアへ。さらに3度目は、シニア海外ボランティアとしてモンゴルの教育局に派遣されることになった。

浮田さんが携わる業務は多岐にわたる。

「まず、日本語教材の作成。今は各学校で違う教科書を使っているので、スタンダードを作り、それに準拠した教材にしたいんです。さらに、初中等教育機関の日本語教師を対象とする勉強会の開催。巡回指導では10校を巡り、ときには日本文化を紹介することも。他にも学校の日本語行事のお手伝い、日本語能力試験、スピーチコンテストなどの運営支援を引き

**自作の教材を使う
子どもたちの笑顔を、
仕事の大きなエネルギーに。**

極寒の地。日本の生活とは全く違う。今年は防寒対策をしっかりとったので、あまり問題は感じませんでした。どんな環境にも自然と馴染んでくるものですね。」

足りないものがあつて当たり前の日常だからこそ、充足したときのありがたさは格別だ。そもそもJICAボランティアに応募しようと思ったのは、サモアの旅行で物質的な豊かさより、心の豊かさを大切にしたいと思ったから。今ではそんな自分で物語ったように感じている。

一人のボランティアの活動が、この国の教育を変える力になる。

3ヵ国目となる教育の現場で、浮田さんは赴任前に言われた言葉を大切にする。

「国の行政機関である教育局で仕事ができるという貴重な機会を活かし、有意義な活動をしてほしい。」

大きな視野で考えることを常に念頭に置き、さまざまな改善をしてきたからこそ、モンゴル政府認定の教科書を作るという大きな仕事にも着手することができた。

「このような仕事ができるのは、JICAボランティアとして行政機関に派遣されたからです。私たち日本語教師が世界の国々に派遣されるには、必ずその理由があります。それを認識していることが重要だと思います。」

任期終了後の浮田さんの夢は、再びモンゴルに戻ってくることだという。

今作成している教材を使って、実際に自分で授業をしたいです。一度海外で

授業を行なう学校や先生たちとの連携も常に意識し、とても大切にしている。

「前任のボランティアが、管轄する22校すべての校長先生や日本語教師に引き合いました。教員の業務は大変だけど、教材作りなどがスムーズになりました。教員の業務は大なり助かりました。その後の活動

受けています。」

授業を行なう学校や先生たちとの連携も常に意識し、とても大切にしている。「前任のボランティアが、管轄する22校すべての校長先生や日本語教師に引き合いました。教員の業務は大なり助かりました。教員の業務は大変だけど、教材作りなどがスムーズになりました。教員の業務は大なり助かりました。その後の活動



子どもたちがそれを使って楽しそうに授業に取り組む姿を見ると、よし、また頑張ろう!という気持ちになりますね。」

モンゴルの子どもたちの笑顔が、浮田さんの仕事への大きな励みとなっている。

物質的な豊かさよりも、心が豊かになるモンゴルの暮らし。

元々海外旅行が好きだったが、旅行と実際に生活するのとでは大違った。現地の人と同じ目線で生活すると、一ぐるのが面白いんです。」

日本では当然あったものが、当たり前でないことが多い。電気・ガス・水道・お湯・インターネットなど、何か一つは欠けているのが日常生活だ。しかも、冬はマイナス35℃にもなる

日本語を教える体験をしたから、本当にやめられなくなってしまうほど楽しいんですよ。」

一人のボランティアの地道な活動が、モンゴルの子どもたちの将来を変えるかもしれない。



シニア海外ボランティア
平成24年度1次隊

浮田 久美子
Kumiko Okita

大学院を卒業後、日本語教師養成講座を終了し、青年海外協力隊としてJICAボランティアに参加。3度目の派遣で、シニア海外ボランティアとしてモンゴルの教育局に派遣。



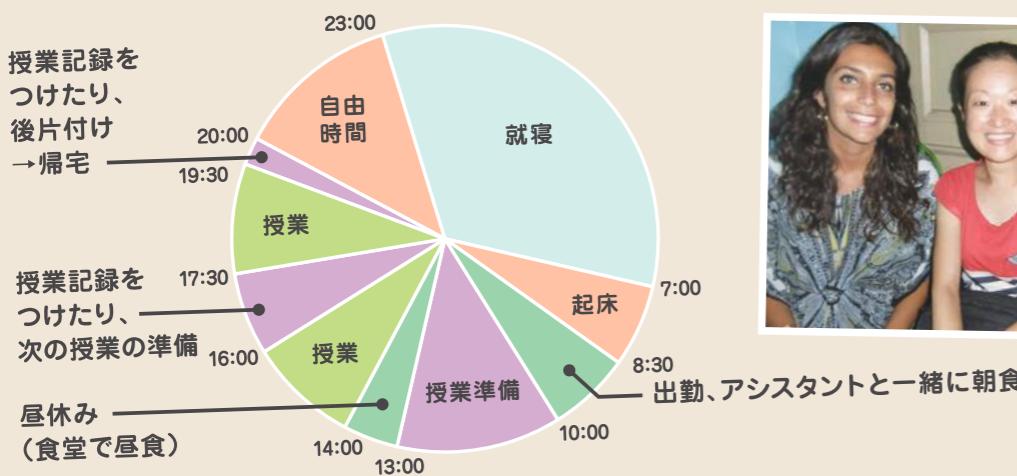
世界中

どこの国であつても、
教えながら、
互いに成長できる
教育環境を。



のぞいてみよう! JICAボランティア

前田さんの、のびのびセネガルライフ!



休日やプライベートの時間は、市場に散策に出かけたり、セネガル人の家へ遊びに出かけます。朝から晩まで、一日一緒に過ごすことが多いですね。たまたま街を歩いていて知り合ったセネガル人家族と一緒に、おしゃべりしたり、お土産をもらったりすることもあります。現地語であるウォロフ語も、ここで実地訓練しています。



**教える場所がどこであつても、
学生のことを考えられる教師に。**

「まだセネガルには赴任したばかり。これからいろいろとやりたいことはあります

が、前任者が行っていたように、学生たち

が楽しめるイベントを取り入れながら、

周囲のサポートが前田さんにとって大きな

心の支えとなっている。



れでもやはり授業は楽しい。
「学生たちに癒されています。私にとって

は、彼らが教師になるときがあるんです。私のフランス語はまだ拙いですが、それを助けてくれるのはいつも学生。教え

つつ、学びつつ、お互いに成長していく環境は本当にありがたかったです。」

また、すぐに相談のつてくれる上司や

アシスタントなど、学校には協力者も多い。

周囲のサポートが前田さんにとって大きな

心の支えとなっている。

学生のことを考えられる教師でありたい、

と前田さんは言う。西アフリカの学生が

日本に行く機会はほとんどないかもしれません

ないが、それでも、決して手を抜くこと

はない。いくら日本語を勉強しても使わ

ないと忘れていくものだし、繰り返しやつ

ていくしかないのだ。

「ときには『まあ、いつか』くらいの気持ちで、気楽にやつしていく方がいいのかも

しませんね。あまり気張らず、学生の要望にこれからも応えていきたいと思って

います。」

前田さんの活動が、日本とアフリカの新たな絆を結んでいくのかもしれない。

青年海外協力隊
平成25年度1次隊前田 智子
Tomoko Maeda

大学卒業後、大学院では日本語教育学を専攻。自分が帰國子女であることから、日本の学校に在籍する日本語を母語としない子どもに興味を持ち、日本語支援がライフワークに。



セネガル共和国 

ひとくちメモ：忘れられない日本語編

●『すみません、ちょっと…』勧誘表現の場面で教えたなら、みんな気に入ったようで、授業中あらゆる場面で多用しています。例えば、「宿題早く出して!…

すみません、ちょっと。」「静かにしなさい!…すみません、ちょっと。」「どうして遅れたんですか!…すみません、ちょっと。」(コスタリカ)

12

自分の国をもっと世界に伝えたい!
それが日本語を教えるきっかけに。

学校があるのは、セネガルの首都ダカールでも賑やかな場所。学生は西アフリカ各国から来ており、学校内での共通語はフランス語を使用している。しかし、一歩外に出ると、現地で使われているウォロフ語が必要になります。

前田さんは、大学2年のときにメキシコに留学。そこで日本語を学ぶ学生に出会つたが、自国のことをうまく伝えられず、思ひ立ち、大学院への進学を決めた。

「日本の小中学校で、日本語を母語としない子どもたちの支援に関わりました。それがとても面白く、やりがいを感じてしまつて。」

大学院修了後、一般企業に勤務したが日本語教師を諦めきれず、2010年に退職。

翌年には、マレーシアの中等教育機関で日本語を教える機会に恵まれた。

「そこで得た経験はとても貴重なものでした。日本語を教えることにますます興味がわきましたね。」

帰国後は、趣味やボランティアとして日本語を教えていたが、もっと本気で日本語を教える環境に浸かつてみたいと思い、JICAボランティアへの参加を考えるようになったという。

**初対面でも歓迎してくれた、
セネガル流のおもてなし。**

前田さんがセネガルに派遣されて6ヵ月(2014年1月時点)。

「セネガルは第二希望。子どもも、成人、学生など、いろんな学習者と学べることに惹かれたんです。でも、国の場合などは知らず、決定後にあわてて調べたほど



きやすい

でもウォロフ語が話せ

は、近所に

親しいセネガル人家族ができ、一緒に食事したりしています。セネガル人には「テランガ」、日本で言うおもてなし精神があり、初対面でも歓迎してくれるのがうれしかったですね。」

まだ生活環境の違いに驚くことも多いが、それが日々の刺激にもなっています。最近は、近所に

親しいセネガル人家族ができ、一緒に食事したりしています。セネガル人には「テランガ」、日本で言うおもてなし精神があり、初対面でも歓迎してくれるのがうれしかったですね。」

まだ生活環境の違いに驚くことも多いが、それが日々の刺激にもなっています。最近は、近所に

親しいセネガル人家族ができ、一緒に食事したりしています。セネガル人には「テランガ」、日本で言うおもてなし精神があり、初対面でも歓迎してくれるのがうれしかったですね。」

「日系社会」の

のぞいてみよう! JICAボランティア

受け継がれる、おもしろイベントをご紹介！

ちびっこバザー

20年前、近隣校に派遣されていたシニアボランティアが導入したイベント。日本語を使って買い物ごっこをする、という年1回開催される行事です。小学校高学年・中学生や父母が店員の役、幼稚園生・小学校低・中学年がお客様役をし、手作りのゲームや父兄からの寄付で集めた衣類・おもちゃなどを商品にして、おもちゃのお金で買い物の練習をします。普段の授業では恥ずかしがって日本語を話そうとしない子どもたちも、その日は積極的に日本語を使おうとします。日系の父母も日本語に触れ合う機会が少ない昨今、日本語を介しての親子間のコミュニケーションにも役立っているようです。



子どもに伝えたい、
日本人としての
誇りと文化。
JICAボランティア
だからこそ
できる教育を。

協力隊員という立場だからこそ
できる」と、
見えてくるものがある。

話を聞いたり
日系人の海外
移住の歴史に

「子どもたちの成長を肌で感じられた時は本当にうれしいですね。学習発表会で練習以上の成果を出したり、学校生活でも、あまり泣かなくなったり。赴任以来彼らの成長を実感できる瞬間はたくさんあります。生徒たちのやる気が、私のモチベーションになっています。」

**将来の日本語教育を担う
先生のために、今できること。**

「子どもたちの成長を肌で感じられた時は本当にうれしいですね。学習発表会で練習以上の成果を出したり、学校生活でも、あまり泣かなくなったり。赴任以来彼らの成長を実感できる瞬間はたくさんありました。生徒たちのやる気が、私のモチベーションになっています。」

続ですが、同僚の先生にアドバイスをいただきながら試行錯誤でやっています。」
自分よりキャラが長い先生が多く、日本語のレベルも想像以上に高かつたことで、赴任当初は自分に「一体何ができるか悩んだ時期もあった。だが、同僚が苦手とする箇所もわかり始め、それらを勉強会で取り入れているという。

A portrait of a young woman with dark, shoulder-length hair, smiling broadly. She is wearing a purple, button-down sweater over a dark turtleneck. The background is a plain, light-colored wall.

日系社会青年ボランティア
平成24年度派遣

正田 瞳子

Akiko Masada
大学のブラジル・ポルトガル語学科を卒業後、国内の民間日本語学校で約2年間勤務。海外では、ベトナム、シンガポールの民間日本語学校、さらに青年海外協力隊としてフィリピンの大学で活動した経験を持つ。



なつていて準備等は大変ですが、子どもたち
はかわいく、成人はやる気があつて授業は常
に活氣がありますね。毎日が楽しいです。」
2つ目は、日本文化関連の活動。工作や、
遊戯や習字などの文化指導と、入学式・
卒業式・運動会・学習発表会・バザーなど
学校行事の準備や参加だ。そして3つ目が、
先生方との勉強会。教科書の分析や、指導
が難しい文法項目に関する講義、また、巡
回指導先で新人教師対象の基本的な指導
法の講義を行っている。

「仕事の内容も多く、まだまだ失敗の連
続ですが、同僚
の先生にアドバイ

日本語教育に熱心な同僚
互いに高め合う関係へ向けて

思っています。2年という短期間ではある
でも、隊員という立場だからこそできる
ことがあります。見えてくるものもあると思
いましたね。」

「フィリピンでは、配属先や他機関の文化イベントで、主催者の協力を得て、イベントのインターミッションとしてよさいいや阿波踊りを披露しました。現地の人々に日本文化に触れてもらうこと、興味をもつてもらうことができたのではないかと

正田さんのJICAボランティアへの参加は、今回で2度目。前回は青年海外協力隊の日本語教師隊員として、フィリピンの大学に赴任していた。そこでは、日本語教師としての技術を磨くことにも増して、信頼関係を築くことの難しさを感じ。相手のやり方を尊重しながら活動を進めていく中で、日本語教師隊員として

力をいれている正田さん。彼らは熱心に参加し、そこで得た経験を実際の授業に活かしてくれている。

「毎回の準備は楽ではありませんが、アルゼンチンの日本語教育の将来を担うかも知れない先生方の役に少しでも立てる」とは、大きな喜びですね。」

『日系社会』という特殊な環境下で、いろいろな人に出会い、さまざまなもの価値観を尊重することの大切さを学んだ正田さん。2度のボランティア経験を通じて、今を大切に生きることの重要さを学んだという。彼女のこれから、日本語教師としての活躍が楽しみだ。

A group of nine children of diverse ethnicities are standing in front of a red brick wall. They are all smiling and appear to be posing for a group photograph. The children are dressed in casual clothing, including jackets, shirts, and pants.

**常に活気のある授業、
同僚とともに試行錯誤の毎日。**

も豊か。人々は良く笑い、ゆったり生活を楽しんでいる。「この街の日本人会が運営するブルサコ日本語学園が、正田さんの配属先だ。日系の父母たちの熱心な思いで61年前に設立され、現在生徒は日系子弟（子供）約90名と、アルゼンチン人（非日系）成人約50名が在籍している。

ひとくちメモ：忘れられない日本語編

●『先生、青い鳥を持っていますか?』てっきりお話を青い鳥だと思い、つまり「幸せですか?」ということを表現しているのかと感心していたら、Twitter の

とでした。(ドミニカ共和国)



貴重な体験。頭で覚えた知識を、肌で実感できた。



生徒たちへ

私は生徒に教える立場ですが、逆に助けられている、教えられることが多いですね。生徒たちはみんな、「自分を成長させようとする気持ち」「学校に何かを求める気持ち」を強く持っています。そんなヤル気に満ちた生徒にいつも助けられて、私も前向きな気持ちで授業をしています。みんな、ありがとう!



同僚の先生たちへ

最初は、言葉が不自由なので、アパート探しからバスの乗り方まで、助けられることばかりの毎日。最近は生活にも慣れてきましたが、電気製品の修理依頼の電話など、未だに複雑なことは助けてもらっています。生活以外にも、仕事の流れや様子がわからない時には、よく質問して教えてもらっていますね。同僚の皆さん、ありがとうございます!



日本とブラジルの文化の違いを、自分自身の目で見たかった。

外国语、特にブラジル人の多い街、愛知県豊橋市の中学校で、国際学級の教員として勤務していた櫻井さん。それ以前には、南米コロンビアでJICAボランティアの日本語教師としての活動経験もある。

「ブラジルから日本に働きに来る家族の子どもたちについては、ある程度のことは知っているつもりでした。それでも、現場に入つてみるとまだまだ多くの問題があります。教育に対する関心の薄さ、不登校、進路の問題、文化の違いからくる誤解……。そんな問題に接するうちに、実際に生徒たちの母国に渡つて、日本とブラジルの違いをもっと深く学びたいと思ったんです。」

もう少し日本で、実績を積んでからでもいいのでは。そんな助言もあつたが、自分自身の目で見ないと納得できないことも数多くあつた。コロンビアでの経験から、ラテンアメリカの子どもたちの力になりたい、という気持ちが人一倍強かつたのだ。

時に戸惑い、時に励まされた、
ブラジル独特の日系社会。

今回は日系社会シニア・ボランティアとして、2度目のJICAボランティアへの応募を決意。見事合格し、希望通りブラジルへの派遣が決定した。

「南米経験もあり、任地の気候や生活にはすぐにと

わかつていたことを、肌で実感できたのだ。最も大きかったのは、失敗を繰り返し、悩んだり人に助けてもらう中で、ありのままの自分を認められるようになつたこと。日々、喜びがあれば苦しいこともあります。感激することもある。そのような学びを通して、人間性が磨かれるのがJICAボランティアだ。今回の活動は櫻井さんにとつて、生徒に日本語を教えるだけではなく、自分の価値観を再発見する大きなチャンスにもなつた。これからJICAボランティアを目指す人たちにも、新たな自分を創造し、人間としての幅を広げてほしいと櫻井さんは願っている。

一人で解決できない問題も、
ブラジル流の大らかさで乗り越える。

この地区のボランティアは、櫻井さんで6代目。代々行ってきた研修会やお話大会、習字や歌の指導、さらに遠足や運動会などのイベントも引き継ぐ形となつた。また、独自に考えたのは、震災にあった子どもたちにクリスマスカードを送る活動や、地区の学校の交流会。イベントを盛り上げるために、お話大会での応援団も結成した。



「この国で苦労した体験が、帰国していく役に立つのでは?と今は思っています。」



JICAボランティアでの体験は、自分を再発見する大きなチャンス。

「そうすると、当初の私の見方とは違う意外なことが見えてきたりしたんですね。また、苦しい時には真の意味での『助けてくれる人』を見極める力がついてきます。困っている私に温かく接してくれた人たちのことは、決して忘れないでしょうね。」



日系社会シニア・ボランティア
平成24年度派遣

櫻井 美香

Mika Sakurai

大学院で国際協力を研究。アメリカの小学校で1年、日系社会青年ボランティアとしてコロンビアで2年、日本語を教えた経験を持つ。中学校の国際学級担当を経て、ブラジルで活動。



ブラジル
連邦共和国



国際協力を目指す生徒の夢、
その後押しをしたい。

「世界の現状を子どもたちにもうと知つてほしい。日本と世界の子どもをつなぎたい。」

中学の頃から国際協力に興味を持ち、大学では海外ボランティアも体験していた

して、まず中学校の英語教員という道を選んだ。協力隊への参加も、以前から考えていたことだ。しかし、なかなか決心できず、生徒の受験対策に追われていた時のこと。

「人の生徒に、『夢は国際協力に関わること。青年海外協力隊になつて世界の役に立ちたいです』と言われ、はつとしました。ためらつてる場合じゃないと思いました。」

鈴木さんはすぐさま協力隊に応募。帰国後に職場復帰できる「現職教員特別参加制度」を利用して、トンガに赴任。

「生徒に身近な私が、国際協力の一つの道を示し、彼らの夢の後押しができたなら。あの生徒の、未来に向かう力強い言が、鈴木さんの背中を押していた。」

「生徒に身近な私が、国際協力の一つの道を示し、彼らの夢の後押しができたなら。あの生徒の、未来に向かう力強い言が、鈴木さんの背中を押していた。」

日本が大好きな生徒たち、彼らの成長を見るのが大きな喜び。

配属先のトンガ高校は、生徒数約1200人。トンガでも優秀な生徒が集まる公立高校だ。日本語は選択科目の「つとしで開講され、現在約80人、5学年の生徒が学ぶ。協力隊によるトンガの日本語教育は20年以上続き、トンガ人の日本語教師が実際に育っている。日本人中心からトンガ人中心の日本語教育への移行を目指した活動も行われている。生徒も日本人に慣れていて、

り体験などいろいろと試しました。なかでも、前任の方とトンガ人の先生が考えた日本語劇『シンデレラ』は、とても盛り上がりましたね。苦労しただけに、無事開催できた時の達成感は大きかったです。」

何でもなんびりで忘れっぽい、トンガといふお国柄。練習が予定通り進まず、焦つて悩んだこともあった。そんなとき、「大丈夫よ、あなたならきっとできるから」と励ましてくれたのも、やはりのんびり、どっしり構えるトンガ人。今は常に、「現地の人と同じ目線に立つこと」という研修中に、大切な現地の生活の中心に、自分の身を置くことを考えている。

「高校生の時、日本語を習つたよ!」街を歩いていると、声をかけてくる人がたくさんいる。これまでの活動がトンガの中にも根付いているな、と実感できる瞬間だ。国際協力に関わっていくことは、人と人との繋がりの中で、それぞれの立場を尊重しながらともに作り上げ、ともに成長していくことだと改めて感じています。」

何事も一人ではできない、多くの人の支えがあつて自分が活動できている。協力隊の方々、派遣前の研修や訓練で出会った仲間、現地とともに活動する協力隊員や、同僚のトンガ人、生徒たち。そして、道

世界のいろいろな価値観を伝え、広い視野を持つた子どもたちを育てていきたい。



のぞいてみよう! JICAボランティア JICAなら安心!

現地でのJICAの支援体制は?

着任後1ヶ月の語学研修、ホームステイプログラムのおかげで、現地に徐々に慣れていくことができました。また、安全、健康面でのサポートもしていただけて安心です。



実際に支援によって助かったことは?

夜中に体調が悪くなつて動きが取れなかつたとき、JICA事務所の方に連絡したところ、すぐに現地顧問医のいる病院に運んでくださいました。



前任者から引き継いで役立ったことは?

活動で必要なことが丁寧にまとめられた冊子を前任者からいただきました。おかげでスムーズに活動を始めることができました。



自分の経験を語り、子どもたちが国際社会へ羽ばたく足掛かりに。

「高校生の時、日本語を習つたよ!」

街を歩いていると、声をかけてくる人がたくさんいる。これまでの活動がトンガの中にも根付いているな、と実感できる瞬間だ。

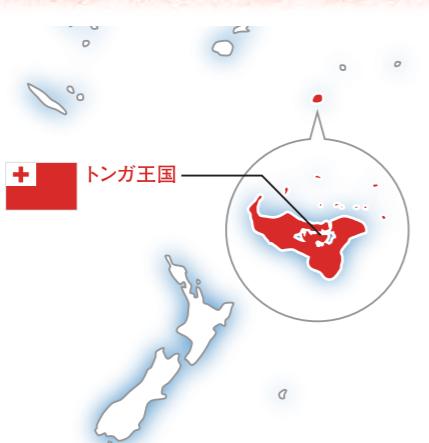
「国際協力に関わっていくことは、人と人との繋がりの中で、それぞれの立場を尊重しながらともに作り上げ、ともに成長していくことだと改めて感じています。」

何事も一人ではできない、多くの人の支えがあつて自分が活動できている。協力隊の方々、派遣前の研修や訓練で出会った仲間、現地とともに活動する協力隊員や、同僚のトンガ人、生徒たち。そして、道



青年海外協力隊
平成25年度1次隊
鈴木 千咲
Chisaki Suzuki

愛知県にある中学校の英語教師。大学で副専攻として日本語教育を学びながら、留学生にボランティアで日本語を教える。その経験を活かし、現職教員特別参加制度(P.29Q&A参照)で青年海外協力隊に参加。



生徒たちの日本のイメージは、とにかくアニメ。また、日本製の自動車や家電が普及しているトンガではその信頼度も高く、高校卒業後、日本に留学したいと考えている生徒も多い。そんな子どもたちの背中を押してあげるのが、ここでは鈴木さんの役目になっている。



鈴木さんの主な仕事は、担当学年授業や試験作成、現地の先生の授業参観。そして、スピーチコンテストや書道コンクールなどイベントの開催だ。そんな中、鈴木さんはできるだけ生徒が日本語を使って、達成感を感じる場を作りたいと思い、全校で日本祭りを企画した。

「日本の歌やスポーツ、運動会、着付けや寿司づくりを膨らませている。鈴木さんは今から、次の大きな夢に胸を膨らませている。」



60歳を過ぎてからの心機一転。

『草の根の外交官』

として、人と人、国と国をつなぐ役割を。

パプアニューギニア

のぞいてみよう! JICAボランティア

生徒たちの、日本語・興味津々!

まご孫はやさしい

初授業の自己紹介で年齢を言うと学生たちは、とても60歳を過ぎているように見えないと驚いてくれました。パプアニューギニアでは、何でも腹一杯食べるのが習慣。中年過ぎにはほとんどの人が、何らかの生活習慣病を患っています。そこで、「孫はやさしい=マ(豆)ゴ(胡麻)ワ(ワカメ・海草)ヤ(野菜)サ(魚)シ(シイタケ・茸)イ(芋)」を万遍なく腹八分で摂取すれば、健康で長生きできる、と教えたたら、学生たちも興味津々でした。



日本語教師として海外へ。
60歳を過ぎてからの新たな挑戦。

気候の良いところとも言われる高原の都市、ゴロカ市。人口は約3万人。そこは鈴木さんにとって、希望通りの任地だつた。

「1年中、夏の軽井沢のような気候です。ニーギニア高地人と聞くと、弓矢で武装したような人を連想するかもしれません。が、根は温厚な農耕民族。高原野菜なども育ちやすい土地柄で、ゴロカの人たちはいつも木陰でのんびり過ごしていますね。」

鈴木さんは、ボリビアへ行つて教えるということでした。他にも中国の大連で時折出張授業を行うという自分より年嵩の男性もいて、大いに啓発されましたね。すぐさまTOEICを受験し、シニア海外ボランティアの募集に願書を出しました。

しかし、不安もあつた。日本語教師としての勤務経験がなかつたこと。また健康面でも、高血圧などの薬を飲んでいた。

「任務に耐えられない体なら合格できないだろうし、もともと経験不足なのがから、受かつたら儲けものと考えていました。」

応募に際して、まずは養成講座時代のテキストを復習。TOEICは幸い基準点に達したが、錆びついていた英語もブラッシュアップ。60歳を過ぎてからの新たな挑戦だった。

「任務に耐えられない体なら合格できないだろうし、もともと経験不足なのがから、受かつたら儲けものと考えていました。」

応募に際して、まずは養成講座時代のテキストを復習。TOEICは幸い基準点に達したが、錆びついていた英語もブラッシュアップ。60歳を過ぎてからの新たな挑戦だった。

パプアニューギニア独立国首都、ポートモレスビーから北西へ400km。「世界一

学生数は少なかつたといふ。

「前期が11人、後期は大学紛争が勃発してしまい、わずか5人。授業で日本紹介のDVDを見せたり、習字や箸の使い方などを教えたり。掲示板に、課外活動としての将棋や折り紙教室の案内を出しましたが、学生の反応は散発的でした。」

教材にも 苦労した。
日本語に どうしても
ローマ字・ ローマ字には
英語が併記
された教科書しかなく、学生は



目が向いてしまうのだ。「後期からは、自分で持参した日本語だけの教科書で授業を行いました。翻訳に手間取りましたが、効果は上がりましたね。」

近々、JICAの支援制度を利用して購入した教科書が届く。今までの授業準備の負担も軽くなるだろう。日本語教師としての本格的な活動はこれからだ。

『草の根の外交官』としての役割を、
さまざまの人との交流で、

赴任して1年、経験も学生数もまだ少ないが、心に残る出来事は多い。
「クラスの学生が、『ビルム』というこの国独特の手編みバッグをプレゼントしてくれたり、見よう見まねで作った未完成の折鶴を持つて教えを乞いに来てくれたり、少しずつお互いの信頼感が生まれてきていい



シニア海外ボランティア
平成24年度3次隊

鈴木 馨

Kaoru Suzuki

一般企業を退職後、多摩市国際交流センターにおいて3年間ボランティアで日本語を教える。シニア海外ボランティアとして、パプアニューギニアのゴロカ大学で活動。



鈴木さんは、「時帰国で受けた健康診断では、すべての数値が改善していた」という。
「海外でのボランティア活動は、私にとってまさに心機一転のいい機会でした。まるで現職の頃に戻ったような気分です。残りの1年も『草の根の外交官』としての意識を持つ、学生やスタッフだけでなく、いろんな人たちと交流を深めていきたいですね。」
バイタリティあふれる鈴木さんのような人と現地の人々との交流が、新たな国際関係を創っていくに違いない。



日本語教師不在のブランクを、
自分なりの工夫で克服。



土地柄で、ゴロカの人たちはいつも木陰でのんびり過ごしていますね。とはいっても、最近まで大学講師でさえも黒魔術を信じていたという土地。赴任当初は、価値観まるで異なる別世界に来たような思いもあつたという。
「それでも、近隣の人たちとの交流が広がるにつれ、住めば都。今では、ゴロカ大好きの人間になっています。」

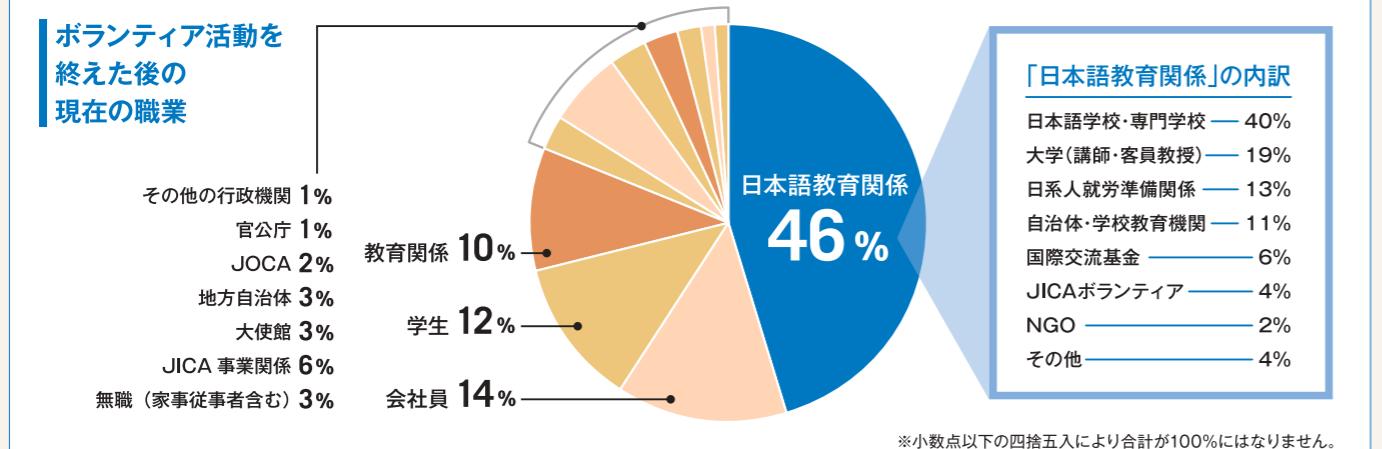
JICAナレッジサイト(日本語教育分野)で 派遣実績と帰国後の進路をご紹介しています。

1965年に青年海外協力隊の初代日本語教師がラオスに派遣されて以来、延べ68カ国に3,635名のJICA日本語教育ボランティアが派遣されており、現在133名のJICA日本語教育ボランティアが各国で活動しています。(2015年10月1日時点の数字で、延べ人數には派遣中人數を含みます。)

JICAナレッジサイト(日本語教育分野)では、JICA日本語教育ボランティアの派遣実績をはじめ、募集期ごとの応募・合格状況、各国の配属先情報などを公開し

JICAナレッジサイト: <http://gwweb.jica.go.jp/km/FSubject2301.nsf/>

ボランティア活動を終えた後、国内外で日本語教育を続ける人、一般企業に勤める人、公立学校等で教職に就く人など、帰国後の進路は様々です。なお、2010年に青年海外協力隊日本語教師及び日系社会青年ボランティア日本語学校教師を対象に帰国後の状況調査が実施されました。(下図参照) 詳しい結果等につきましては、右記サイトで公開されておりますので、そちらもご覧ください。



ひとくちメモ：余暇の過ごし方編

●せっかく南の島に住んでいるのだから、海を楽しむなければもったいない!ということで、ほぼ毎週サンゴ礁の青い海に通っています。おかげでストレスか

JICAボランティアに対する JICAの支援制度を一部ご紹介します。

JICAでは、派遣前、派遣中、そして派遣後に、以下のような支援を行っています。

受入機関での協力活動で必要とされる実務的な技術・技能などの向上を図ることを目的とした研修です。原則、青年海外協力隊及び日系社会青年ボランティアが対象です。期間、場所は適宜指定されます。

派遣前

技術補完研修



青年海外協力隊及び日系社会青年ボランティアは70日間、シニア海外ボランティア及び日系シニアボランティアは35日間の合宿制の訓練です。二本松(福島)、駒ヶ根(長野)の訓練所などで、現地で必要な語学学習を中心、JICAボランティアとして必要な知識(ボランティア事業、異文化理解、安全管理、健康管理など)を学びます。

派遣前訓練

派遣前訓練



青年海外協力隊事務局に在籍する日本語教育分野の専門家(技術顧問)に活動に関する助言や指導を求めることがあります。各在外事務所に健康管理員(日本の看護師免許取得者)を配置し、健康相談、病気・医療情報の提供などを行っています。

派遣後

派遣後 教育訓練手当

帰国後に、さらなる技術・技能の修得または免許・資格の取得につながる教育訓練、進学に対して、JICAが支援する制度です。日本語教育ボランティアでは、大学院進学での利用が多いです。詳細はWEBサイト「JICAボランティア 教育訓練手当」をご覧ください。

派遣中

活動支援

青年海外協力隊事務局に在籍する日本語教育分野の専門家(技術顧問)に活動に関する助言や指導を求めることがあります。

派遣中

健康管理支援

らくる体調不良からも解放されました。自然の癒しは本当にすばらしいですね!(マーシャル)

苦労の連続だった毎日が、一生の忘れられない思い出に。

やはり皆さんも、それぞれの任国で、自分なりの何かを残してきた実感をお持ちのようですな。

宮越 次に繋がることを残したいと思います。自分が離れたら、今までやつてきたことがなくなってしまうのは悲しいですからね。

宮村 私はアメリカ留学からの帰国後に日本語教育ボランティアとして海外の地に赴き、そこで運営している日本語学校で、生徒は日系人の子弟や現地の子どもたち。大学で日本語教育の勉強をして、卒業したばかりだったんですが、以前から年少の子どもたちに日本語を教えてみたかったので迷わず応募しました。現地で求められていたことと、自分自身のやってみたかったことが一致していたので、とても充実した2年間を過ごせました。

鈴木 私はアメリカ留学からの帰国後に日本語教育養成講座に通い、受講中に応募しました。赴任先是中國で、希望した国ではなかったのですが、日本語教師になりたい気持ちが強かったので、参加しました。活動中はいつも悩んでいたような気がしますが、帰国した今ではすべてが楽しかった思い出ですね。

佐久間 私はアメリカ留学からの帰国後に日本語教育養成講座に通って、受講中に応募しました。赴任先是中國で、希望した国ではなかったのですが、日本語教師になりたい気持ちが強かったので、参加しました。活動中はいつも悩んでいたような気がしますが、帰国した今ではすべてが楽しかった思い出ですね。

宮越 学生や同僚、現地の人との、人と人の繋がりも私にとって大きな財産ですね。

座談会参加者のご紹介



佐久間 勝彦

聖心女子大学
日本語日本文学科 教授(取材時)
日本語教育分野の技術顧問として、30年以上にわたりJICA日本語教育ボランティアを支援。常に国際協力としての日本語教育を模索し、グローバル人材の育成を目指した活動を展開。

木村 佳代子

青年海外協力隊
平成21年度2次隊

宮越 正史

青年海外協力隊
平成19年度4次隊

私は要請内容には、現地の教員に対する日本語教授法の指導も含まれていたのですが、何もできなかつたと悩み、帰国が近づいた頃、配属校で現地の日本語教育学会を開催することになりました。主催校として同僚教員が講義を担当することになったので、その準備に役立てばと思い、日本語教育の理論と実践について伝えました。ずっと自分の中で温めていたことが、ようやく実を結んだと思いましたね。

宮村 私はアメリカ留学からの帰国後に日本語教育養成講座に通い、受講中に応募しました。赴任先是中國で、希望した国ではなかったのですが、日本語教師になりたい気持ちが強かったので、参加しました。活動中はいつも悩んでいたような気がしますが、帰国した今ではすべてが楽しかった思い出ですね。

鈴木 私はアメリカ留学からの帰国後に日本語教育養成講座に通って、受講中に応募しました。赴任先是中國で、希望した国ではなかったのですが、日本語教師になりたい気持ちが強かったので、参加しました。活動中はいつも悩んでいたような気がしますが、帰国した今ではすべてが楽しかった思い出ですね。

佐久間 私はアメリカ留学からの帰国後に日本語教育養成講座に通って、受講中に応募しました。赴任先是中國で、希望した国ではなかったのですが、日本語教師になりたい気持ちが強かったので、参加しました。活動中はいつも悩んでいたような気がしますが、帰国した今ではすべてが楽しかった思い出ですね。

宮越 学生や同僚、現地の人との、人と人の繋がりも私にとって大きな財産ですね。



日本語教師の夢が叶った、JICAボランティアの2年間。

JICA日本語教育ボランティアとして海外の地に赴き、それぞれの国で、自分なりの個性を活かした活動を行ってきた4人のJICAボランティア。任地での体験や、そこで感じたこと。そして、帰国後の日本での活躍などを、日本語教育分野の技術顧問として、長年ボランティアを見守ってこられた佐久間技術顧問を交えて伺いました。

JICAボランティア始まった、日本語教師への道。
皆さん、まずは日本語教育ボランティアとしてパラグアイで活動しました。日本語教育の勉強をして、卒業したばかりだったんですが、以前から年少の子どもたちに日本語を教えてみたかったので迷わず応募しました。現地で求められていたことと、自分自身のやってみたかったことが一致していたので、とても充実した2年間を過ごせました。

宮村 私はアメリカ留学からの帰国後に日本語教育養成講座に通い、受講中に応募しました。赴任先是中國で、希望した国ではなかったのですが、日本語教師になりたい気持ちが強かったので、参加しました。活動中はいつも悩んでいたような気がしますが、帰国した今ではすべてが楽しかった思い出ですね。

鈴木 私はアメリカ留学からの帰国後に日本語教育養成講座に通って、受講中に応募しました。赴任先是中國で、希望した国ではなかったのですが、日本語教師になりたい気持ちが強かったので、参加しました。活動中はいつも悩んでいたような気がしますが、帰国した今ではすべてが楽しかった思い出ですね。

佐久間 私はアメリカ留学からの帰国後に日本語教育養成講座に通って、受講中に応募しました。赴任先是中國で、希望した国ではなかったのですが、日本語教師になりたい気持ちが強かったので、参加しました。活動中はいつも悩んでいたような気がしますが、帰国した今ではすべてが楽しかった思い出ですね。

宮越 私はアメリカ留学からの帰国後に日本語教育養成講座に通い、受講中に応募しました。赴任先是中國で、希望した国ではなかったのですが、日本語教師になりたい気持ちが強かったので、参加しました。活動中はいつも悩んでいたような気がしますが、帰国した今ではすべてが楽しかった思い出ですね。

太原 木村さんも言われたように、日本語教師といつても資格条件を満たしてもすぐ国内で職を得られるわけじゃなく、経験が必要なんです。私の場合はまずラオスで個人契約の現地採用で4年間ほど経験を得て、それから協力隊に応募しました。立場を変えて、自分の経験とスキルを活かせる場を探したかったんです。

鈴木 JICAボランティアに参加して良かつたと思うことはありますか？

宮越 個人の現地採用で行くケースと違い、協力隊の場合はJICAの支援、現地事務所もあって、しっかりとバックアップサポートがあるのが大きいですね。

鈴木 そうですね。JICAの派遣ということで、安心して活動できました。

木村 個人の現地採用で他の職業の方との繋がりがなかなかできないですが、協力隊には日本語教師以外にも作業者が強かったので、参加しました。活動中はいつも悩んでいたような気がしますが、帰国した今ではすべてが楽しかった思い出ですね。

木村 派遣前は会社員でした。日本語教師という仕事にずっと興味があり、勤めながら夜間は養成講座に通っていました。

鈴木 私はアメリカ留学からの帰国後に日本語教育養成講座に通って、受講中に応募しました。赴任先是中國で、希望した国ではなかったのですが、日本語教師になりたい気持ちが強かったので、参加しました。活動中はいつも悩んでいたような気がしますが、帰国した今ではすべてが楽しかった思い出ですね。

佐久間 私は30年以上青年海外協力隊に携わっていますが、今、宮越さんや太原さんが言われたようなことは、JICAボランティアだからこそ経験できるんですね。

太原 そうですね、人との「ミユニケーション」は大切ですね。家から学校まで、普通は交通手段を使う距離なんですが、私は必ず歩いて行っていたんです。それがいい意味

で目立つていて、昨年再び任地を訪問したら、今も私のことを覚えてくれている人がいました。

佐久間 私は30年以上青年海外協力隊に携わっていますが、今、宮越さんや太原さんが言われたようなことは、JICAボランティアだからこそ経験できるんですね。

太原 このような話は、協力隊に関係していないと決して聞くことができません。「先生」という立場よりも、ある意味では「友人」であり、「仲間」である。現地の生活にとにかく込んで、同じ目線で、というのがJICAボランティアならではの姿勢ですね。

ました。

太原 JICAボランティアで行くということは、日本という看板と信用を背負っているわけです。行った時からある程度、相手の信用を得ているので非常に話はしやすいです。政府高官とでも話ができるくらいですからね。個人で行く場合には、最初に話を聞いてもらうだけでも信頼構築に時間がかかります。そこが、大きなかけでしたね。また、協力隊にはノルマがあるわけではありません。そのかわり、すべて自分で考え、自分で行動して、分析する。いわば、「一人プロジェクト」と言えるような醍醐味はありますね。

佐久間 今、太原さんも言われたように、信用度が違うのと同時に、責任もあるわけですね。学生がアルバイトで貯めたお金や、中高年の方が退職金を使って、海外に行って働くのとはわけが違う。JICAのボランティア事業はもうすぐ50周年ですが、ずっと日本の税金がベースになっていますから、JICAボランティアはそれを心に留めて活動していると思います。よほど神経が固たい人でない限り、マイペースでやるよと言つて、2年間本当にマイペースで活動して帰国した人はいないでしょう。日本の看板を背負って行ったからこそ、頑張れたという人も多いと思いますよ。

宮越 次に繋がることを残したいと思います。自分が離れたら、今までやつてきたことがなくなってしまうのは悲しいですからね。

宮村 次に繋がることを残したいと思います。自分が離れたら、今までやつてきたことがなくなってしまうのは悲しいですからね。

宮越 次に繋がることを残したいと思います。自分が離れたら、今までやつてきたことがなくなってしまうのは悲しいですからね。

宮村 次に繋がることを残したいと思います。自分が離れたら、今までやつてきたことがなくなってしまうのは悲しいですからね。

宮越 次に繋がることを残したいと思います。自分が離れたら、今までやつてきたことがなくなってしまうのは悲しいですからね。

宮村 次に繋がることを残したいと思います。自分が離れたら、今までやつてきたことがなくなってしまうのは悲しいですからね。

私の場合は、「日本村」という場所を大学の構内に設けて、日本の文化を紹介したり、学生と遊んだり、日本食を体験できたりできるよう企画したんです。帰国する時は、今後も続けられるように学生に村長を託しました。それが今でも残っていると聞いて、少しは自分の足跡を中国に残せたかなあと思っています。

鈴木 私が日本語教師として一番うれしかったのは、スピーチコンテストですね。全国大会で、自分の指導した生徒が入賞したんです。日系人ではありませんでしたが、日本語の勉強にとても熱心でした。「先生、ありがとうございました」と実感できました。同僚の歓迎はもちろんですが、町の人が受け入れてくれたというのが一番うれしかったです。

木村 最後の授業の日に教室に行こうとしたら、学生が体育館に呼んてくれて、みんなが輪になって日本語で「翼をください」を歌ってくれたんです。ひとり1本ずつ、バラの花を渡してくれながら。感動して涙が止まりませんでした。みんな思いは一生できなないでしあうね。2年間の疲れが吹き飛びました。

太原 私の要請内容には、現地の教員に対する日本語教授法の指導も含まれていたのですが、何もできなかつたと悩み、帰国が近づいた頃、配属校で現地の日本語教育学会を開催することになりました。主催校として同僚教員が講義を担当することになったので、その準備に役立てばと思い、日本語教育の理論と実践について伝えました。ずっと自分の中で温めていたことが、ようやく実を結んだと思いましたね。

宮越 学生や同僚、現地の人との、人と人の繋がりも私にとって大きな財産ですね。

JICA日本語教育ボランティア Q & A

JICA日本語教育ボランティアに
応募するための条件は何ですか。

A1

JICA日本語教育ボランティアでは、ほぼすべての派遣先において「日本語教育に関する資格保持」を条件としています。ここでの資格とは、「420時間程度の日本語教師養成講座」「大学または大学院の日本語教育主専攻・副専攻」「日本語教育能力検定試験」で扱う内容に相当します。派遣先によっては、その他の条件が加わることがあります。

日本語教育について

Q2

まったく知識がないのですが、応募できますか。

応募は可能ですが、A1で述べたとおり「日本語教育に関する資格保持」を条件の一つとしていますので、日本語教育に関する知識・技能を得てからのご応募をお勧めします。

日本語教師として働いたことがないのですが、
実務経験は絶対必要ですか。

A3

実務経験がなくても応募は可能です。派遣先が実務経験を条件としていることもあります。しかし、JICA日本語教育ボランティアは即戦力として学校などで日本語の授業を行うことが求められる派遣先がほとんどですので、クラス形式での授業を経験しておくことをお勧めします。派遣先で求められる経験年数については、WEBサイト「JICAボランティア 要請情報検索」をご確認ください。

どこで日本語教師としての
経験を積むことができますか。

A4

日本語学校等で日本語教師として働くほかに、自治体の国際交流協会等が実施している日本語教室で日本語を教えるボランティアを募集していることもありますので、そちらで経験を積むのも方法の一つです。

派遣先ではボランティア一人で
日本語を教えるのですか。

Q5

現地の同僚教師がいる場合もありますし、一人で教える場合もあります。配属先によって異なりますので、詳細はWEBサイト「JICAボランティア 要請情報検索」をご覧ください。

現在何名のJICA日本語教育
ボランティアが派遣されていますか。

Q6

WEBサイト「JICAナレッジサイト」の日本語教育分野で、年2回(4月／10月) 日本語教育ボランティアの累計及び派遣中人数を公開しています。

JICA日本語教育ボランティアが現地で
どんな活動をしているのか知りたいのですが。

Q7

WEBサイト「JICA世界HOTアングル」及びFacebookページ「JICA日本語教育ボランティア」で派遣中ボランティアの活動の様子がご覧いただけます。